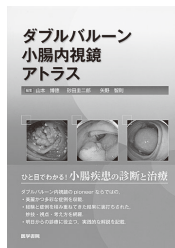


書評

[評者]
松井 敏幸
 福岡大学教授・
 筑紫病院消化器科



ダブルバルーン 小腸内視鏡アトラス

山本 博徳, 砂田圭二郎, 矢野 智則 編

B5判 頁144 2009年
 定価 9,450 円(本体 9,000 円+税 5%)
 [ISBN978-4-260-00714-6] 医学書院刊

小腸内視鏡は、現在学会や研究会で研究対象として隆盛を極めている。また、日本に限らず世界でも臨床応用が急速に進んでいる。その礎をつくられた山本博徳先生の本ができた。過去を振り返ると、カプセル内視鏡(VCE)の臨床応用が始まって間もなくダブルバルーン内視鏡(DBE)が作製された。当時のわれわれの心境は、「そんなの信じられない」であった。間もなく、DBEが実際に現れ、山本先生が指導に來られた。多くの驚きと期待でDBEの使用が始まった。壮大なマジックを見るような思いであった。それまで小生の施設では、小腸疾患の多くはX線検査で診断され、ブッシュ式内視鏡や術中内視鏡で確認する作業が行われてきた。それで不自由はないと思ってきた。現在も小腸疾患の初回診断はX線検査が行われ、それは有用性を失ってはいない。ただし、そのような世界は九州のわれわれの関連施設に限られるようである。DBEの挿入技術は著しく進歩している。それに伴いDBEの診断能も日進月歩である。本書では、まず手技に関する総論に相当のページが割かれている。その内容は、DBEの仕組み(なぜ小腸全域を観察できるのか)、DBE検査を行うに当たって(知っておくべき基本事項)、挿入手技(効率のよい挿入に、基本原理はここでも活きる)、偶発症と防止策(特有の偶発症を理解することで、事前に防止できる)、治療手技(内視鏡治療の実際)である。DBEが普及し多くの診療に使用されているが、基本に立ち戻って確実に安全な操作をしてほしいとの希望が込められている。DBEの安全性

に関する治験が行われ保険申請前でもあり、重要な願いであろう。海外にも極めて多くのDBE使用者がおり、すでにアトラスが出版されている。本書は、それに負けない内容になっていると思われる。

各論では、多くの疾患がわかりやすく解説されている。序に書かれている通り、その症例はほぼ自治医大の経験例に限られ、その数は42例にも及び、重要な疾患が網羅され、しかも厳選されている。実際の臨床に即してX線検査やDBE所見、さらには病理所見もわかりやすく提示されている。後半には、治療の実際にも触れられる最新の内容が盛り込まれている。症例提示は、悪性腫瘍、良性腫瘍、ポリポース、炎症性腸疾患、出血性病変、特殊な疾患の順と思われる。特に出血性病変は矢野・山本分類に沿って提示され、治療法もその分類に従って異なることが理解される。ただし、症例提示が、系統的な順番でない。症例の目次がなく、症例の現れる順番のオリエンテーションがつきにくい。最小限の文献提示があるとさらによかった。今後、各施設で多くのDBE症例が経験され、さて最終診断は何であろうか、治療はどうすべきであろうか迷うことも多くなるはずである。そうしたとき本書が有用であろう。また、基本操作に迷うとき、あるいは治療に際し補助具を使用する際に本書を参考にされるとよい。また、NSAIDs小腸炎をはじめ、Crohn病などの小腸の炎症性疾患の病態解明や治療評価に必須の操作になりつつある。DBEを通して学問の進歩に大きな貢献が期待される。